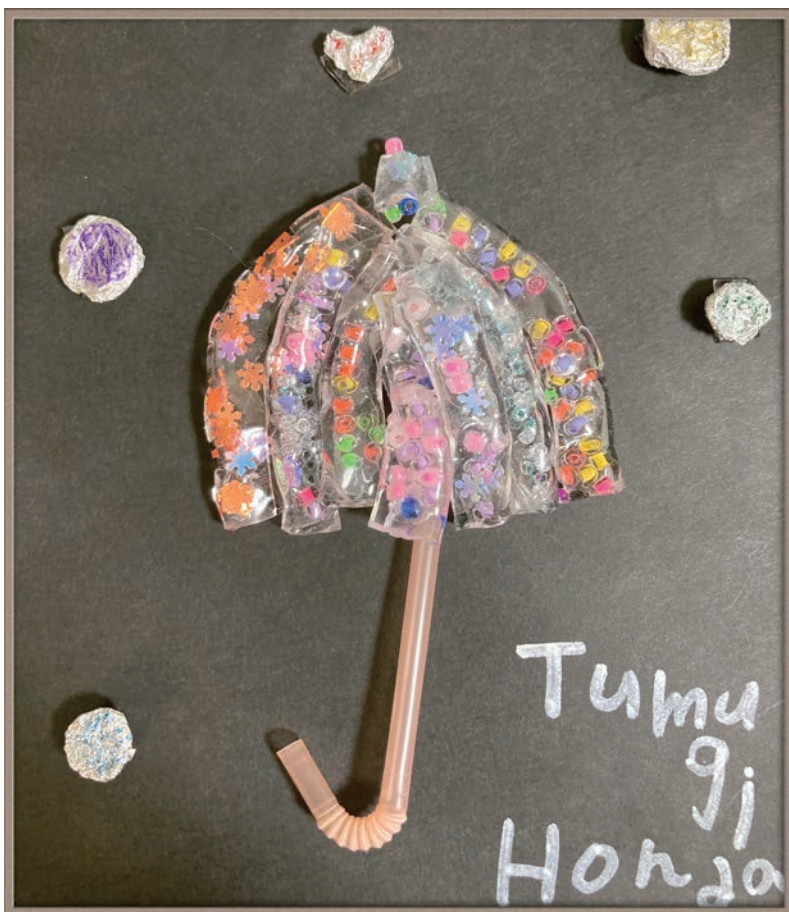


三河アララギ

2023年 令和5年7月 文月
ふみづき

七 月 号

第七十卷 第七号



ニューヨーク日記(201) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

FROM MAIKO TO GEIKO

Blue Shoe Diaries



私がマイアミライフを満喫している間、地球の向こう側、京都の祇園では、タマユさんはとても特別なお祝いに参加していました。榎里子ちゃんの舞妓さんから芸妓さんになる日です。断髪式の儀式にも参加して、黒髪舞も観てこれよりどっぷりジャパカルチャーに浸かれないくらい日本にいました。榎里子ちゃん、おめでとう！ もう素敵な芸妓さんですね。

While I've been settling into Miami life, on the other side of the globe in Gion, Kyoto, Tamayu-san had the privilege of celebrating Maiko-san, Mariko's graduation to become a Geiko-san (aka Geisha-san as called in other regions of Japan). Participating in a hair-cutting ritual in this process and getting to see a very special dance called Kurokami that's only performed during this time.

目次

第七十卷第七号(通卷八三五号)

表紙 本田つむぎ(1)

ニューヨーク日記(20) Blue Stone(2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫(4)

歌集「草々後集」 今泉 米子(5)

昭和61年八月号作品 大須賀寿恵(6)

昭和61年八月号作品 夏目 勝弘(7)

歌集 八千代 岡本八千代(8)

今日より臯月 弓谷 久子(10)

クロッキー 今泉 由利(12)

御榊と 安藤 和代(14)

頑張る 清澤 範子(16)

今日のこと 山口千恵子(18)

破竹 杉浦恵美子(20)

昔の栄華 伊藤 忠男(22)

花壇 白井 信昭(24)

言の葉 矢崎 直人(26)

『いこよせ』 いーはとぶ 稲吉 友江(28)

鈴木美耶子(28)

吉見 幸子(29)

牧原 正枝(29)

森 厚子(30)

水野 絹子(30)

牧原 規恵(31)

大武 智子(31)

現代学生百人一首 東洋大学

山下わかかな(32)

田代 桃(32)

藤井 帆海(32)

高田佳穂子(32)

高橋 玲亜(33)

照井 志穂(33)

横溝麻志穂(33)

大場 美言(33)

植村 公女(34)

今泉 如雲(34)

木村 歩歩(35)

矢崎 直人(35)

今泉 由利(35)

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集(36)

五感を澄ませば(13) 杉浦恵美子(38)

附録(十三) 矢崎 直人(40)

『人生いたるところ青山あり?!』 中屋 保之(42)

楽しい時間(128) 山本紀久雄(44)

『酔いの徒然』(135) 丸山酔宵子(46)

『赤い鳥飛んだ／風のひろば』 高橋 育郎(48)

絹の話(152) 今泉 雅勝(50)

『江上浩二の独り言』 江上 浩二(52)

初狩便り20 花野みぷり(54)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

康鍼治療院 本田 勇氣(56)

『偶作 昨夜落雷激し』 殿山 木風(60)

編集室だより 今泉 由利(62)

『三河アララギ』について (64)

歌集 わが冬葵

御津磯夫

沈丁花ひとつもと赤くひろごりて茂吉之墓の文字はかはらず

二十年のあひだに三度まゐり來ぬ青山の空きさらぎ雲る

アララギのいたくは伸びずその葉さへ凍みいろにして年のすぎにき

三度來しみ墓の石は低ければわが手をぞ置く腰をかがめて

妻と子とともに來りて言ふこともすでにあらざる茂吉先生の墓

枝細く撓める紅梅の一木あり花は散りそむ墓地の礫に

墓原の土黒くして重ねれどわがふむ靴につくほどならず

みたび來てみたび迷へるみ墓みち齡すぎつつまたも來むかも

ゆきずりのごとくに來り對ひ立つささぐる水もわがたづさへず

いくたびか危ふく病みてわれつひに茂吉先生のよはひを超えむ

歌集 「草々後集」

今 泉 米 子

つくし摘みて歸れる吾が子がすみれなど五鉢ばかり植ゑて並べぬ

雨雫ふくみて栗の花重し雨間の低き雲は動かず

あかときを一時風のしづまりて銀杏黄葉にさせる月かげ

吾が子の飼ふ蠶稚くカステラの空箱の中に十匹あまり

吾が子の飼ふ箱の蠶は本箱へ入れて寝るらし鼠おそれて

夜半までも眠るいとまのなき夫に子どもらのことなども話さず

岡先生のみ歌にありて植ゑたりし侘助椿わびすけの花咲きぬ寄りゆく

亡き母の惜しみいまして皿小鉢日々のくらしに吾が使ひつつ

亡き母の縫ひ直しおきし浴衣にて父が夕べの空を見てゐる

銀座にて豊旗雲染めしネクタイを夫に買ひたり三十年前に

昭和61年8月号作品

大須賀寿恵

庭松の幹あかあかと夕日射し光りがよふ編集室に

掌に水を掬ひて露を打つ鈴虫五匹の虫籠の中に

土砂降りの雨に傘さし剪りに出づわが初成りの鈴虫の茄子

拭き終へて廊下にひとり坐りたり梅雨の晴れ間の六月の風

スーパ―の帰り楽しく提げてをり鳥取砂丘の匂ふ沙辣萋

夏の日の光の中に黄にそよぐへちまの花は糸瓜のかたち

するすると抜け来る音を楽しみてフェンスにからむ露草を引く

糸瓜の蔓今日三米を越えにけり支柱の竹をつたひ降り来よ

垂れてゐし棟の梢のびたちぬ梅雨あがりたる六月の風

風なくて動けるリラの下枝あり雫落してそり返りつつ

昭和61年8月号作品

夏目勝弘

高齢化を憂ふる声の多けれど高齢化には高齢化の繁栄あらむ
新人類といふも耳に慣らされぬ我が子等もその部類に入らむ
提案の努力賞の図書券もてユダヤを知らむ本を買ひたり
念仏を唱へるごとしその職場の活性化活性化活性化をと
営業と公共性とを両立させよ卑屈なまでに己を殺せ
月給日の過ぎてたちまち月給日まであと幾日と数ふる憐れ
前後左右確かむるは道を横切るならず我が下風を放たむがため
苦竹の動き止みたる夕風に我もしばらく息を止めぬむ
追ひ払ふも顔のあたりに寄りてくる黒き糠子をわれは憎める
黒松の今年のミドリの硬きこと遅き梅雨入にかかはりありや

歌集 八千代
蒲郡 岡本八千代

序

波静かな内海、三河湾の最も奥まったところに、万葉の安礼乃埼にも擬すべき小さい岬があり、小さい漁村がある。この歌集「八千代」の著者岡本八千代氏は、このよき環境に生れ育くまれて中学の国語教師となった。いつまでも、その内海のおだやかさと稚いままの如き、ま球のごとき素直さを保ちながら、そこにあたかも、わが三河アララギがあり、八千代があつたのである。三十年にして教職を退くまでの作品をまとめあげたのがこの一卷である。三河アララギの伝統を正しく守って、その名の如くやさしく、しづかである。てらひのないその人柄と歌との美しさを私は見守ってゆかうと思ふ。

昭和五十九年立春日

御津磯 夫

ペンペンと鳴るがごとくに聞こゆると耳澄まさせて授業はじむる

ツベルクリンの注射にけふは生徒らの腕拭きしのみにて一日過ぎけり

今年の卒業記念樹はポプラにて南庭の端より並ぶその十三本

往き還りする畔道の草に生ひし菜の花の黄も淡くなりゆく

味噌汁をたきおきてけふも吾子らみな眠れるうちに勤めに出づる

下宿せし家のをばさんの金婚式に青き織部の夫婦茶碗買ふ

熱とれし母の手をとり庭に出づ高く花咲く向日葵の下

電燈に光る生徒の作文の鉛筆書きも読み慣れて来ぬ

通行止め解かれし朝の通学路田には小豆の淡き紫

脳硬化症に終日ねむる母の部屋窓にま赤き夾竹桃の花

今日より皐月

豊川 弓谷 久子

奥山の木立で啼くか鶯の声透り来る今日より皐月

子の点てる抹茶に今日は柏餅心静かな二人のくらし

子供の日と呼ばれて久し端午の節句母手作りの柏餅憶ふ

テレビドラマ突如変って放送は能登半島の大地震告ぐる

大地震に続く大雨被災地の人等はいかにと案ずるばかり

天災は明日は我が身かさけ難し地震多発の今日この頃よ

はやばやと子と孫が来て母の日を今年も祝いてくれゆきぬ

テーブルに子が飾りたり豊川市名産と聞くバラ十本

母の日に五日遅れて咲き出せり我が丹精のカーネーション

風にゆれる風情がいと麥桔梗うすくれないに咲き並びをり

京都奈良旅し給える上皇様ご夫妻の笑顔素晴らしきかな

国をあげて祝いしあの日よ上皇様産まれ給いし我が幼なき日

賑やかな柄楽しみて縫いてをり子と子の友へのペアチュニック

一日で変る気象に老いの身はついて行げずに狼狽えてをり

定まらぬ気温と気候台風も発生しをり梅雨も真近し

クロッキー

東京 今泉 由利

幾度か始めのありきまた始むイーゼル立てて裸婦クロッキー

今日よりは玉由と共にイーゼルを並べて描く人の姿を

回想す始めしは東京そしてブエノスアイレスカリフォルニアNYそしてまた東京

夕刻の恵比寿の町のひとところアトリエのあり裸婦のクロッキー

6Bの鉛筆よりいづる線にして大胆であり強烈でありそしてやさしい

6Bの鉛筆の芯をしつらえて自分好みのクロッキータイム

クロッキーブックどんどんどんどん溜りゆく捨てられないもの増える

もっと上手に描きたい！そんな思いはたちまち消ゆる

何事の思考も消えてひたすらに6B鉛筆線の勢い

それぞれの見ゆる姿よ心の内よ本当のことのみ伝ひきたる

太陽より毎秒10兆個のニュートリノ素通りをしているらしい

地球より月までの約38万キロそんな距離かと月をながめる

太陽は地球より109倍大きいと太陽光にて日光浴

初夏の光のなかにおとなしく自分自身でありたく思う

ヒマラヤの山麓にしてダーズリン今朝の紅茶の一杯は

御榊と

豊川 安藤 和代

朝あさを鉢花に水注ぎゆく咲き次ぐ花にことばかけつつ

花の如赤き新芽の御榊を供え皐月の朝の清しき

若いとは唯それだけで美しいセーラー服になびく黒髪

幼稚園からの仲よし今日もモーニングランチ過ぎても話はつきず

もう八十まだ八十と言いかえて胸もとピンクのスカーフ結ぶ

木の葉かと見紛う黄蝶が木々の間を低くひくくと縫って去りゆく

薬師寺の地蔵の顔もにこやかに青葉若葉に染まるこの月

帰省せし孫と語れば考えも越されこされて柿若葉風

孫からの東京土産の人形焼き可愛いく楽しく食むをためらう

孫娘初めて彼をつれて来るバアチャンそわそわ牡丹咲き初む

手の平の錠剤ひとつコロリ逃げ隠れ上手よキッチン隅

何事ぞへりコプターが音高く藤の花房揺れの乱るる

知床の追悼式と当選祝並ぶ紙面に葉桜も泣く

アマリリス大き葉を出しこの夏も庭の主演と自信満々

夕焼けに染まりし空を二分して飛行機雲は淡あわ続く

頑張る

春日井 清澤 範子

夫の三回忌法要娘一人で信州穂高へ夫の特急しなので無事終りにけり

吾の知らぬうち娘はスーパーにてバームクーヘンとアイスクリームを買って来てくれぬ

シルバーカーを引き足踏みしめて進みゆくポストに投函し朝の歩みに

二度目の大腸カメラをする次は右足のギプスをとらねばならぬ

右足のギプスは当分痛みますよと主治医メモ欄次々娘吾の病院ばかり

夕空にこんなきれいなあかね雲庭の貝塚照らして沈む

抗ガン剤の休薬の日は他科の診療に又病院なり

私は家の中より外へ出る時は車椅子なり娘が引きて

リハビリの足前後の運動をなるべく娘の負担にならぬよう吾頑張る

夕陽さす貝塚伊吹の苔むして赤く染めゆく光静かに

病院の休憩室より眺むれば桜満開いと美しきかな

抗ガン剤三粒カペシタビン朝まつ先にのどに通す

今日のソナ

豊川 山口千恵子

道端に呆けしタンポポ立ち並ぶ夫とわれとの午後の散歩道

一面の麦の穂つくつく静まれり風なき午後の散歩道ゆく

今朝も又のろのろ庭を横切りゆく斑模様のやせた野良猫

母逝きし五月の又巡り来るサボテン咲けり赤き花々

庭隅の鉢に今年も赤き花一日にしほむサボテンの花

母逝きて十幾年のたちにけり告げたき事々ふつと思へり

庭の草取りゐるわれの傍に隣家に飼へる鶏寄りくる

傍らに寄り来て虫を啄む鶏に草取る手を止め声などかけゐる

散り溜まる小さき花を踏み行きぬ黄色鮮やか黄素馨の花

読み辛き字引の文字も良く見えるLEDライト付きルーペ

しばしの間フェンス越しに立ち話人とはなしするも稀なる日々

日々色の変はりつつゆく麦の原日射しおだやか麦秋近づく

若葉から青葉にかはる山の色五月の風の吹き渡りゆく

先々のことは思はず今日のこと白き花咲くドクダミを抜く

ドクダミを抜きて匂へる手のままに厨に夕餉の仕度はじむる

破竹

蒲郡 杉浦恵美子

我が夫の晩年二年は共に訪ふ五月連休山形秋田路

一年目夫はスキーへ鳥海山我は最上の境田分水嶺

二年目は別行動を切り上げて共に訪ねし稲庭饅頭

夕刊を取り込む黄昏軒先の羽虫の群を最早見るまい

我が家にてヨアンナ一番好みしは蜂蜜入りの珈琲なりき

エスプレッソに蜂蜜たっぷりヨアンナの習慣こっそり試してみたり

本廟に貴方もお詣りなさったか岐阜の訛りか老人の問ふ

我が持てるペットボトルのラベル見て老人問ひぬ本廟詣るや

正に我阿弥陀堂にて合唱の一員なりき慶讃法要

時間こそ違へど東本願寺詣でしことを共に慶ぶ

本廟詣で契機になりて弾みたり各駅停車はこれが楽しい

老人は岐阜にて降車車窓より最敬礼を我にする見ゆ

ああこれは隣が届けて呉れしもの玄関先に破竹が三本

先だつて破竹のことを立ち話したばかりなり我が好物

ほんのりとえぐみはあれど軟らかし破竹皮ごと焼いて食せば

昔の栄華

大阪 伊藤 忠 男

東雲の光のどけき春の海寄せる波音慎ましきかな

その昔鯖街道の拠点なり今は人影探すほどなり

小浜駅降りて目にするアーケードシャッター通り寂しげなりや

焼き鯖を求めあちこち街歩く探し当てたは日が落ちてから

鯖街道都と若狭つなぐ道色褪せ霞む看板の文字

祭礼と祭りで残る食文化そこに意気込み垣間見るなり

海沿いの家に新しうだつあり白く塗られて栄華留める

我が国の玄関出雲若狭能登見直すべきや海の往来

寺院あり遺跡もあちこち文化都市人影まばら残念なりや

大井川鐵道列車ここ起点乗って目にする乗客二人

「合格」の次は「門出」かなるほどと笑みがこぼれる駅名の妙

湖の中に浮かんだ無人駅降りてひと息幸せな時

スリルありパノラマ景色見とれたり吊り橋わたる満点の旅

この景色独り占めとは贅沢か今も誰とて会わぬこの道

人込みもこの時期何故か懐かしき帰り立つ駅大阪の駅

花壇

豊川 白井 信昭

木香薔薇ばら落ち散らばふ萼明日はけば良い今朝吹かれをり

狭庭さ辺の花壇に一本小手毬は萌え来たらず大方かれし

窓越しに雪柳また小手毬こでまりの花見しことも今は懐かし

今日よりは花壇の解体始めむと水仙・野草アマリリスと扱ぐ

小手毬の枯枝見分け根元よりすべて伐り落としたり

枝かかえ引きずり台車び乗せ変えて裏道ゆつくり生垣奥へ

生垣に水仙・紫陽花・山野草・アマリリス・小手毬移し了えたり

いつしかに名も知らねども一株の草は紅くれなゐに咲きつぐ五月

根元の崩れし所掘り下げて大き石より順に入れゆく

ベニヤ板と豆板の間石つめてバケツトはめ込み重しを乗せる

孫匠真四歳四ヶ月年中組妻と遊べるシャボン玉あげ

西空にふうわりふうわり窓に見ゆパラグライダー空中散歩

サルスベリ枯れしものとは思いつつ根元に見ゆる新たな芽生え

花壇にニオイバンマツリ植え直し花咲かぬまま六月に入る

咲き残る花もあらむか登り来て『さがらの森』に笹百合さけり

言の葉

埼玉 矢崎 直人

一日で理解するには遠くとも体験に得ることもあるかと

仕事して始めてしまえば集中し気の仕事へと向けゆけるものは

人を見るとこまでそれをやれるのか心身共に問われてゆけり

「やって」だと誰にも出来ない自分にもそれを利用者教へてくれる

どうだろうどうだろうかを考える利用者から教わることの

利用者のこと一番に一番に考え何が一番になるか

草むしり頑張ってやる報告をしにきてくれる人のあるらし

思いをば手紙に書いてくれし人あたたかき筆うれしかるらし

折り紙で伝える心心遣ひ折つてのばしてひらける心

人間の意志の力や強かりき強く強く願える力

働かせてもらえることの有難み共に過ごせる利用者に感謝

暮らしにもなじんできたり職場にもこれから徐々に仕事を覚えん

朝昼夕うたた寝してるとき増ゆる動ける身体維持せんとして

疲れをも感じてはいも充実を感じられてる一歩進んで

臨場のその場を綴る言の葉と言葉を読んでつかめる技術

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

我が家の隣に二軒の家の建ち変はる風景時の流れつつ

稲吉友江

断捨離をしやうと色々捨ててみるされど無限なりゴミの山々

今日も又母の入れ歯を洗ひゐるこの頃あまりお茶いかないなあ

仲間らと西浦園地ゆ春の海ただ見つめゐる遠々の海

鈴木美耶子

よく晴れた園地の先の春の海両の手に余る白金の海

いつも見る貨物船より小さきがいつくへ向かふかギンギラの海を

今朝の庭に福寿草咲く買ひ求めし豊川稲荷の露天の店に

吉見幸子

あんを炊き牡丹餅供ふ春彼岸夫と食すほどよき甘さ

届きくるLINE映像の卒業式ノーマスクでの少年の顔

番組も衣替へとの講師紹介「短歌ブーム」の若さになじめるや

牧原正枝

高々と積み木のごとく立ち上がる一人の技師の仕上げるは電柱

電柱の真上に座り何をするの部品は横で引き上げらるる

コロナ禍の自粛はとけてチャラボコの音鳴り渡る花冷えのゆふべ
抱かれゐる幼はパン持つ手を挙げぬ背後の鳶に餌やるごとく

森 厚子

誕生月だからと私は甘やかされ日々過ごすなり齡とるもよろし

リフト待つ間「パー・ジウ・シー」とガイドの声松山城の桜咲き初む

水野 絹子

中三の孫はLINEに盛り上がる明くれば別の道行く友と

ジョン万次郎の強き視線の先の海足摺の海よ地球は丸し

制服が私服になりて大学生孫は悩んだりまた楽しさう

牧原規惠

コロナ禍の自粛残りて寂しげに孫は一人で入学式へ

暑き日も寒き日もありわが畑のビニールシート開けたり閉めたり

風に靡く青葉若葉を見つつゆくりフトに五分笠松公園

大武智子

観音会の始まり待てば新緑のお庭にチャイムの流れて来たり

昨夜聞きてやがて忘れむ人の名の一つありありとしてビル・ゲイツ

茎立ちて黄花背高く咲きてゐる葉牡丹らしき道の辺に見る

鴨は長く鳴きつつ空渡る浅春の雨上がれば寒し

いつまでも明るき四月の夕暮れの灰白き桜バスに見てゆく

現代学生百人一首

東洋大学

着信で半トーンほど上がる声いつから母と同じになった？

北海道札幌北高等学校二年 山下 わかな

二回目のワクチン接種終わったよ単身赴任の父への切符

北海道美唄聖華高等学校三年 田代 桃

コロナ禍でマスク生活定着しドラマの中の少しの違和感

北海道美唄聖華高等学校三年 藤井 帆海

ありがとうコートに向けて最後の礼リング見上げて新たな夢を

青森県立三本木農業高等学校三年 高田 佳穂子

グーグルの使用法孫に聞くごめんねそれはグーグルなのよ

一 関修紅高等学校三年(岩手県) 高橋 玲亜

初デート二人並んで歩く道これがいわゆる青春あおはるなのか

専修大学北上高等学校二年(岩手県) 照井 志穂

レジの前ライン引かれて気が付けば等差数列みたいに並ぶ

聖ウルスラ学院英智高等学校二年(宮城県) 横溝 麻志穂

次はいつ会えるのかしらと泣く祖母の手も握れずにガラスと会話

宮城県宮城野高等学校二年 大場 美言

『俳句』

ポケットにキャラメル一個梅雨じめり

植村公女

逃げ水や私のなかの水溜り

若者の葬見送りぬ青嵐

閉ざされし半蔵門や黒揚羽

今泉如雲

ユリノキの花自立たなく三宅坂

いかめしき桜田門や姫女苑

法華経の功德を積まん花見鳥

木村歩歩

老鷺の天空突かん箱根山

朝もやに雉がのぞくや勝手口

今日生きて卓上に一輪のばら

子どもの日こどもみたいな人のいて

矢崎直人

初夏や少し遅れしバスを待つ

バタバタと羽根を動かす燕の子

燕二羽カラスに追われ逃げ惑ふ

飛べ飛べと燕にエール送りたり

光とふ素粒子集め日向ぼこ

今泉由利

大地より四段のぼる仏の座

木漏れ日を集めて白し山くちなし梔子花

千両科一人静は花を終ふ

ササユリは聖母マリアを守りゐる

今日の夏私の命最前線

自らの心のままに花山椒

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

鷺一羽餌をさがしいて植田かな
どろがおたがわらたうえ

秋山

泥顔に互いに笑い田植する
かわせみ

翡翠を待たねば来る待てば来ず
はつ田植え足が抜けずに大慌て

古民家の戸袋より巢立鳥

雅山

日々近づく春の兆しの散歩道
ばらばらに手を挙げ園児の横断路
グラウンドに球児のかけ声夏めざす
細草の匂いわき立つ雨あがり

木風

花開き地蔵へ誘うハルジオン
新緑に思いも新合祀祭

濛濛と只濛濛と梅雨最中

新旧の共存するや隠岐の夏

雄山

春ぶかし四囲にうごめく日の光

淳

絹さやの背丈のびたつ日の光

坪庭にひっそりと咲くしゃがの花

あやめ咲きにぎわう川辺の道の駅

君恵

苗青く白さぎの群れ声高く

ひと灯りちよいと踏み入りや春夜の夢

貴山

端午の日ちまき眺めて母思う

恵風

旬の鯀親子で語る在りし日を

母の日に届く息子のジャスマン花

衣替え白シャツ姿の眩しさや

五感を澄ませば (13) 杉浦恵美子

号泣

新聞のテレビ番組表などの惹句によく「号泣」とあります。何があったのと野次馬根性で視ると当人はせいぜい涙ぐむ程度。「こんなの号泣じゃない」と憤慨。

それで心配になるのは子供たちが号泣の意味を誤解するのではないかと。

号泣とは「大声をあげて泣くこと」しかもどんなに涙を流しても大声でなければ号泣とは言わない。また「密かに号泣する」などの使い方もない。

となると、号泣場面というのは極めて限られます。

私の周辺でそういう場面があったかなと振り返っても思い浮かびません。

では、私自身はどうであったか。

悲しいことも辛いこともそれなりにあったけれど号泣までは……。

待てよ。私は幼い頃、一旦泣き出すと軽く一時間は泣き止まないと言っ評判の子だったではないか。

でもそれって号泣って言えるの。

号泣はやはり「新明解国語辞典」の説明のように「(ふだんは泣かない大の男が) 天にも届けとばかりに悲しみ泣くこと」でしょう。

しかしそういう場面って神話や昔話にはありそうでも現実にはどうでしょうか。

号泣の語感が強過ぎるし、「大人が我を忘れて泣くなどとはみっともない」という思いが日本人の意識の根底にありそう。

因みに号泣に関する古歌があるかなと調べてみましたが、やはり見つかりません。

「忍び泣く」「すすり泣く」「むせび泣く」「泣き濡れる」「泣き沈む」「泣き暮す」「貫い泣き」などの密やかさこそが歌になり得るのではないのでしょうか。

一時的な感情の奔出ではなく、持続的な哀しみの方が日本人の気分に沿っているのかも。

例えば演歌等の歌詞を思い浮かべてみると枚挙に暇なし。

「こごえそな鷗みつめ泣いていました」

「汽笛が独りぼっちで泣いている」

「尽くして泣きぬれてそして愛されて」

「涙で綴りかけたお別れの手紙」

「君への想い涙そうそう」

歌詞をみると、私たちはそのときの感情に突き動かされて泣くよりも、敢えて哀しい場面を想定して、その世界にどっぷり浸かるのを好む傾向があるかもしれない。

「新古今三夕の和歌」もまさにその例。

さびしさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕暮れ

寂蓮

心なき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮れ

西行

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

定家

三首とも泣くまではいかなくても「しみじみとももの哀しい」情景の中に立つ歌人の孤独感がひしひし。

やはり日本人は直接的な感情表現はあまり得意でないのか、好まないのか。

例えば「喜怒哀楽が激しい」というのは、「感情を露わにする」というニュアンスが含まれているため、誉め言葉ではないようです。

ところで、号泣の例を万葉集の中に探しているうち、防人歌の

韓衣裾に取り付き泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして
第20巻4401他田舎人大嶋

を見つけました。この歌は制作年が判っています。西暦755年。千三百年も昔。

母は亡くなったのか、唯一の保護者である父は信州から遠い遠い筑紫へ防人として行かねばならぬ。そんな境遇で残された子供たちはどうなったのだろうと胸が締め付けられます。それに父だって生きて戻れる保証なし。

私が小学一年の時、組に両親を同時に失った男の子がいて、一時は叔母さん宅に同居するも、じきに遠い施設へと去って行きました。

何十年経ても時々彼のことを思い出します。

そのくらいですから、それよりもっと大昔の庶民の哀しいドラマが、このような形で生々しく結実していることに感動を覚えます。

わっと泣く感情奔出よけれども何ぞ難かる収むることは

附 録 (十三)

矢 崎 直 人

【就職】

一日で理解に届くは遠くとも体験に得ることもあるかと

三月一杯で仕事を辞めてからしばらくして、一度見学に行った福祉施設の方からご連絡をいただき、一日体験をさせていただきました。生活支援のお仕事で、不安も迷いも戸惑いもありました。職員の多くは未経験で他業種からの転職の方が多く、ゆっくり時間をかけて仕事を覚えていけばいいということで、やってみようと思い五月から働き始めました。

「やって」だと誰にも出来ない自分にもそれを利用者教へてくれる
どうだろうどうだろうかを考える利用者から教わることの

利用者の方々はひとりひとり様々な個性があつて、日常生活においても出来ること出来ないことがあります。その支援をするのが私の仕事です。自分には出来ることであっても、人にやってもらうのは大変難しいとつくづく思います。

働かせてもらえることの有難み共に過ごせる利用者感謝

暮らしにもなじんできたり職場にもこれから徐々に仕事を覚えん

思いを言葉に出来る人がいれば、それが出来ない人がいます。してほしいことを教えてくれる人がいれば、それが出来ない人がいます。拒否することもコミュニケーションであったりします。一ヶ月働いて一緒に時間を過ごしていると、施設の暮らしになじんできたようです。他の職員の方の仕事をみさせてもらって、少しずつ私も身体を動かします。

施設に燕の巣があります。子どもが生まれたのか、中庭の短い距離を少し飛んでは休み、少し飛んでは休みしています。大人になれば空を切るように飛ぶことが出来るようになるのが子どもはバタバタと羽根をバタつかせていました。

バタバタと羽根を動かす燕の子
飛べ飛べと燕にエール送りたり

朝は、駅からバスに二十分以上乗ります。本をひらいて読みはじめるのですが、何ページか読んでいるとバス停とバス停の間隔があいて次第に眠くなります。お昼は一時間休みがあつて、お弁当を食べ終わると椅子に座ったまま昼寝をします。帰りのバスの中では、駅に着く頃には寝ています。少しの時間でも目を瞑って眠るとスッキリします。

朝昼夕方たた寝してるとき増ゆる動ける身体維持せんとして

『人生いたるところ青山あり?!』

中屋保之

頭の言葉を初めて耳にしたのは、半世紀以上前の事。私がまだ紅顔の美少年?だった、高校を卒業する頃であつたらうか。以来この詩の一節は、私の中では、ッかつこいい、青春を賛美する言葉、ッとして長いこと留まつたのである。そして、半世紀以上人生を重ねた今、齢七十五にして改めてこの詩に再会し勉強し直す機会を得た。

將東遊題壁

將まさに東遊とうゆうせんとして壁へきに題だいす

男兒立志出鄉關

男兒だんじ志こころを立てて郷關きょうかんを出いづ

學若無成不復還

學がく若もし成なる無なくんば復またた還かえらず

埋骨何期墳墓地

骨ほねを埋うずむる何なんぞ期きせん 墳墓ふんぼの地ち

人間到處有青山

人間じんかん到いたる処ところ 青山せいざん有あり

幕末の詩僧で現在の山口県周防の出である釈しゃく 月性げつしょうの作と言われる。因みに、同姓同名音で、やはり幕末の勤王僧で西郷隆盛とともに錦江湾で入水した人物とは別人であることも知った。更に、この有名な「到處有青山 青山有り」には作者が三人とも！面白い。月性を遡ること七六〇年余り、北宋の詩人蘇軾そしやくに拠る説、また、伊勢（三重県）の漢詩人村松文三という説もあるという。月性、文三ともに勤王の志厚く頼山陽、篠崎小竹などと酒食を共にし悲憤慷慨していたと想像を逞しくするのも一興である。

獄中であつて死を覚悟した蘇軾が弟の蘇轍そてつに託した詩の中に、是いたる処ところの青山 骨を埋うずむ可べしとある。これをモチー

フにしたのであろうか。志を立て故郷を出たからには何処で命が尽きようとも、そこが私の墳墓となるのだ、という月性の覚悟が看取れる。新選組局長の近藤勇が養父宛の手紙に添えた一片の詩に

丈夫 志を立てて

東関を出づ

宿願 成る無くんば

復たとは還らず

報国尽忠 三尺の劍

十年磨いて腰間に在り

また、毛沢東などは十七歳の折り父親宛ての便りで完バク（完全なバクリ）している。

留めて父親に呈す

毛沢東

孩兒志を立てて郷関を出づ

学びて名を成さざれば誓つて還らず

骨を埋むるに何ぞ桑の地を須いん

人間 処として青山たらざる無し

日本人のひとりとして誇らしい、と同時に現代人として、その矜持在りや無しや?!

楽しい時間 128 山本紀久雄

2023年5月31日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十三

前号で、明治天皇が治世のための判断基準を持つためへの道程がスタートしたのが明治13年（1880）であり、鉄舟も大悟から次なる剣の道完成に向かったのが明治13年と述べた。

ここで鉄舟の「大悟」について補足したい。というより、今の時代、誰もが「大悟」など言う実態と境地に至っていないのであるから、言葉で「大悟」と書かれても、それぞれ受け止め方が違うだろうし、中には何のことかわからないという読者もおられると推測できる。要するに、身近な表現によつて「大悟」ということを解説しなければいけないと思う。

という前提で、改めて大悟した状況を鉄舟が「剣法と禅理」（『山岡鉄舟 剣禅話』高野澄編訳 徳間書店 1971刊）で記しているので、それを概略整理して述べたい。

ある日、鉄舟のところに揮毫依頼で尋ねてきた豪商の某（平沼専蔵18037~1913のこと）。平沼は横浜で貿易に成功、平沼銀行を創設）が、次のように語ったのであるが、それが鉄舟に大きな影響を与えた。

「世の中というものはおかしなものだ。貧しい家に生まれたのに、今では巨万の財産をつくることができた。それへの道筋は、若い頃四、五百円の金ができて品物を仕入れたが、物価は下がり気味、そこで早く売り払ってしまおうと思っていると、周りでは

私の弱みにつけこみ、安く買ったところとしたので、すっかり迷ってしまいました。そこで、私はすっぱりと決心を固め、どうにでもなれと放っておいた。

そのうちに、商人たちが原価の二割高で買うというので、今度私が一割高では嫌だと突っぱねたのですが、それではもう五分だけ増そうと買値を釣り上げてきた。

そのタイミングで売ってしまったが、欲を出して、もっと高く、もっと高く、と思っているうちに、結局、原価より二割以上も安い値で売るといふ結果になってしまった。

これで商いの気合ということを知ったのは、これが初めてであったが、これで分かったのです。

思い切つて大きな商売をしてやろうというときは、勝ち負けや損得にビクビクしては、商売ならぬものと分かったのです。つまり、これは必ず儲かるぞと思つてしまうと、ドキドキするし、損をするのではないかと思うと、自分の身体が縮むような気分になつてしまふ。

そこで、こんなことで心配しているようでは、とうてい大事業は出来ないと思ひ直し、それからはたとえどんなことを計画するにしても、まず自分の心をしっかりさせ、思いを定めて、次にいざ仕事に取り掛かった時は、あれこれ一切考えないようにして、どしどし実行するようになってきたら、今日のような実態になれたのです」

これに鉄舟は深く頷き、「平沼、お主は禅の極意を話している」というと同時に「解けた」と叫んだ。これが明治13年3月25日のこと。

これが鉄舟の極意を得た瞬間を述べた『憲法と禅理』の圧巻

で、数えて45歳。鉄舟は無刀流を開いたのであるが、これでも「大悟」はよくわからない。

そこで採り上げたいのは『武の素描』（大保木輝雄著 日本武道館 2000年刊）である。

大保木輝雄氏は現在「日本武道学会会長」であり、著書『武の素描』は気を中心にした体験的武道論であつて、この本を参考に「大悟」について整理してみたい。

『武の素描』で、大保木氏が1990年にイタリアで3カ月間、剣道指導を通じて交流されてきたことが書かれている。

大保木氏が、イタリア人剣道実践者から依頼された第一声は「日本の剣道を教えて欲しい」ということであつたという。だが、その意図についてすぐにつかめず返答に窮したとある。

そこで何度か尋ねてみたところ「スポーツ的な、試合に勝つための剣道ではない剣道」だという。ならば「剣道の基本」を指導しよう思い、そのためには「気剣体一致した基本打突」をどのように伝え、理解してもらうかがポイントだと考えた。

そこでイタリアでの指導は、まずは剣体一致の動きを目標し、作り出し、呼吸（気）を調べて一致させ、気剣体一致の基本打ち、切り返し、打ち込み稽古などを中心に行つてきたといわれる。

このような大保木氏のイタリアでの実践行動を知り、剣道に対して新鮮な感覚を持ち得たが、筆者は反省しなければいけないと気づいた。

それは、このような剣道の基本的な実践行動を理解しないまま、鉄舟について検討してきたことである。

改めて、鉄舟は何に對して最大の関心を持ち、厳しい修行を自らに課してきたのかを考えてみたい。

それは「呼吸と心の関係」だと大保木氏は述べる。同書から引用したい。

まず、武道においては《強烈に心理的プレッシャーのかかる触即発の場で、外からの情報を鋭敏に感じ取れる受動性と、間髪をいれず対応できる能動性を兼ね備えた「生きた身体」でなくてはならないといひ、ここで重要なのが「呼吸」である》

《生命の維持に呼吸は不可欠である。息（イキ）は「生き」に通じ、「心」のはたらしにも深く関係しているが、普段、我々はそれを無意識に行つている。しかし、武道や芸道においては、この呼吸の訓練が重要な意味を持ち、技法・心法を深めるとともに、生命の根源への気付きをももたらしたと言つても過言ではないだろう》

《この呼吸と心の関係について苦心した人物が、山岡鉄舟である》
《鉄舟は二十八歳で浅利又七郎と出会い、剣法における心の持ち方について真剣に取り組み、それから十七年間「呼吸」の工夫に専念し、四十五歳の時に大悟・解決をみたのであつた》と解説されている。

ここから読み取れる鉄舟の「大悟」境地とは何か。

それは、極限状況に追い込まれても、慌てないで、その場の状況を正しく認識し、的確な判断と、迅速な行動をとれるようになったことを意味し、武道に例えれば、お互い強烈な圧力をかけあふことによつて、「触即発の緊張した関係となり、全く日常とは異なるが、その場合でも「平常心」で乗り切れるようになることではないかという。

次号でも大悟について検討したい。

『酔いの徒然』（二三五）

丸山 酔宵子

炎天の佐渡はいずこぞ弥彦山

酔宵子

『佐渡を訪ねて』

5月に入り、今年は雨が多く不安定な毎日が続いていたが、突如、真夏日が出現した日に、佐渡に行ってみようと、車で一路関越道へ。

松尾芭蕉の名句『荒海や佐渡に横たふ天の川』は出雲崎から佐渡を眺めて詠んだ句であるが、先ず弥彦山に向かって頂上から佐渡を眺めようと、カーナビに弥彦山と設定し向かったのである。

弥彦山は新潟平野の中央部の日本海に面した佐渡弥彦米山国定公園の中にあり、新潟県人の心のふるさととして仰がれている。日本百名山の著者深田久弥をして「名山には違いないが、絶対的な標高が足りなかった」と記されているように、海岸よりいきなり突き出した秀麗な山容をしている。標高は634メートルで東京スカイツリーと同じである。

弥彦山付近の天気は30度を超え、佐渡を臨む日本海は真夏のような太陽を浴びていて、佐渡を臨む日本海は限りなく朦朧としている。

弥彦山から弥彦神社をお参りし、今夜は新潟泊りである。ホテルにチェックインして美味しい酒と肴で一献と、ぶらりと古町界隈に向かうが、新潟港から両津港まで、朝早いジェットフォイルで行くので、古町は早々に引き上げたのである。

早朝の新潟港はあいにくの雨で、昨日とは打って変わって肌寒さを感じる。雨模様の日本海で視界ゼロ。1時間強で両津港について、早速レンタカーを借り、先ず世界遺産登録申請中の佐渡金山へ向かう。

佐渡本島を横断して佐渡金山に向かうのであるが、佐渡の平日の道路はのんびりして、初夏の青々とした樹々や田園地帯を快適にドライブできる。約1時間程で、忽然と金山跡らしい山肌が見えてきて、佐渡金山の入り口である。世界遺産登録を目指す佐渡金山の玄関口として、金銀生産の仕組みや徳川幕府300年の財政的価値を最新の映像、模型、ジオラマで紹介する施設になっている。300年も前に、遠く離れた佐渡の孤島に連れてこられた罪人達が、こんなに深く、また幾重にも掘り進んだ過酷な状況を目の当たりに見ると、地下の湿気った冷たさ

ともに肌寒さを感じる。

江戸幕府の財政の3割を担っていたという佐渡金山の重要性は、金山近くにある佐渡奉行所跡の史跡でよくわかるのである。

地下を這ふ金山無残肌寒し

酔宵子

日本海の孤島佐渡は、承久3（1221）年に勃発した承久の乱（かまくら幕府と朝廷の戦い）で敗れた順徳天皇の流刑地として有名であるが、その後、日蓮（1271年鳥流し）そして世阿弥（永享6年・1434年流刑）もこの孤島に足跡を残したのである。

順徳天皇も世阿弥も、洗練された京都の文化を持つてこの佐渡に流されてきたのである。それとともに驚くのが、全島各地に京都や大和の名刹が落ち着いた雰囲気で行むんでいる。長谷寺は牡丹の有名な古刹として有名であるが、当地では長谷寺（セイコクジ）と呼ばれるが、大和路と似た風景の中にあり、牡丹も躑躅も咲いている。また、清水寺（センスイジ）も同じような風景の中に、せり出した舞台がある。

石段の牡丹鮮やか古刹かな

酔宵子

佐渡の宿はネットのエクスペディア・サイトで検索予約し、一番評価の高く、価格もリーズナブルで、周りは田園の広がる中にポツンとある小さなチャイミングなコテッジ「ローゼン・キャッツ」に泊まる。

ローゼン・キャッツの名前の通り、コテッジの裏には精魂込めたバラ園とかわいい猫が6匹のこだわりの宿である。ネットでの予約が主体で、拠って外人客が大半だそうで、素泊まりが基本、食事一切のサービスは無しで、あくまで快適な自然と眠りを提供することなのである。

オーナーのHさんは、佐渡両津生まれで高校卒業後、ファッション関連の学校を卒業し、アパレルで国際的に活躍後佐渡に戻ってローゼン・キャッツを始めたのである。

Hさんが突然、「…あそこに、朱鷺が飛んでますよ！」即座にアイフォーンのカメラで連写したのは言うまでもないが、ローゼン・キャッツは朱鷺の故郷のど真ん中で、そのすぐ近くに朱鷺神社があるのだ。

田植え待つ空高く飛ぶ朱鷺一羽

酔宵子

赤い鳥 飛んだ

高橋 育郎

赤い鳥 とんだ

あすを夢みて 眠れ

青い空を とんだ

いついつまでも きらめいて

高い木に とまって

赤い実を たべた

金の船 こぐよ

見あげる人たち うれしそう

広い海で こぐよ

金の星 ひかる

世界の果てまで 行くの

宵の空に ひかる

行ってみたいな よその国

ふけゆく夜は しずか

風のひろば

高橋育郎

風のひろばは こどものひろば
ほっぺのふくらむ かわいいこ
鬼ごっこするもの このゆびとまれ
ジャンケンポンよ あいこでしょ
まけたらおによ おいかける
風もいっしょに ワーイにげろ
風のひろばは げんきなひろば
かけあしするこ とんできた
このゆびとまれ なにして遊ぼう
おしくらまんじゅう おにごっこ
おにさんこちら 手のなるほうへ
風もいっしょに とびまわる

風のひろばは たこあげひろば
絵だこに字だこ やっこだこ
高くあがった うなりだこ
なわとびしましょう つなひきしよう
あっちもこっちも げんきなこ
風もいっしょに 遊んでる
風のひろばは 夕やけ小やけ
おててつないで かえりましょう
いちばんぼーし みつけた
あしたてんきに しておくれ
歌をうたって おててをふって
さよならさよなら またあした

絹の話 (152)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

日本の絹のあけぼの

長江文明前後の時代背景

今から1万年以前東アジアは現在の気温より3℃～5℃ほど高くなり、照葉・ナラ樹林の北上と共に木の実や昆虫、動物などを求めて人々も北上を続けました。

当初は命のつなぎに里芋を持参して西はアッサム、マレー半島、雲南、南はセレベス島などから続々と北上したと思われます（里芋のDNAを調べると渡来人のルーツが判る）。（註1）

これが日本では縄文人の渡来ではないでしょうか。三代丸山遺跡に見られる様に東日本の人口が25万人に対し西日本では1万人程度であった事を考えると、当時東北日本が温暖で採取狩猟主体の生活が如何に豊かであったかを如実に物語っています。

中国では長江（揚子江）河口、中流が発展し、稲作養蚕漁労の農耕文化が始まり、黄河流域に及んで行き、採取狩猟生活から粟作を中心とした畑作農業が発展して行

きました。（註2）

その頃、黄河流域に長江文化から伝わった養蚕繭の綿、紬（繇絮）技術が漢族によって生糸を揚げる事が発見され、その後、薄くしなやかな絹織物（蟬翼烟霧）を織る棚機（七夕祭りの始まり）が発明され、絹の交易で北方から馬と鉄を入手した黄河文明は先ず鉄で農機具を作り、強力な騎馬軍団を作り目覚ましい発展期に入ります。ところが4000年位前に東アジアは寒冷期に入って人々は南下を始めました。

そうすると長江文化と黄河文化や北方から南下した匈奴との衝突が起こり、人々が広く拡散して行きました。日本では寒冷化のため縄文人人口は1/3に激減して、縄文文化は終焉して行き、弥生文化の人々との交わりは少なかったようです。

その時、黄河文化の漢族に圧迫された長江文化の人々が続々と稲作養蚕文化を携えて隼人、熊襲、ヤマトノオロチ（山陰8族）、ヤマトなど諸族が西日本に渡来して来て、弥生文化が形成され、人口も西日本を中心に60万人になろうとしていました。

日向に辿り着いたヤマト族（天照大神）は熊襲と和議し、天照大神の弟のスサノウの尊がヤマトノオロチを平定し、大国主尊（スサノウの尊の息子）がヤマトノオロ

チの尾から出てきたと言われる草薙の剣を天照大神に捧げ、出雲の国の国譲りを行い、ヤマト族は強大になって行きます。ところが、隼人との確執は4世紀後半の応神天皇の時代まで尾を引いて行き、明治の西南戦争にまで繋がって行くのです。

絹で新しい国作りをした応神天皇とは

応神天皇は第15代天皇で三韓征伐をした神功皇后（朝鮮半島から生糸文化を導いた）の子息で、中国春秋戦国時代に秦が絹を多角利用（高級織物、防矢兵服、紙）して中国の戦乱を勝ち抜いた様に、自国の統一を図るべく、中国の戦乱を避けて高句麗などに逃避していた「秦氏」など絹織物（生糸）を中心に土木、鉱山冶金など多くの技術者集団を招聘し、国を富ませ渡来人の秦氏と組んで隼人を征伐した天皇です。

その後、戦勝神社として現大分県に応神天皇を主祭神、神功皇后を祭神として宇佐神宮が造営されました。

宇佐神宮は秦氏の力によって造営されたので、仏教を持ち込んだ秦氏の力を取り込むため、古来からの神道と仏教思想を取り込んだ「八幡神社」として崇敬される様になりました。

現在の全国神社の1/3を占める八幡様の総本山と

なっています。

絹が国を富ます

中国の歴代王朝の興隆は絹に負う所が大きく、唐の繁栄には目をみはる物があります。日本でも明治中期から絹が国の財政支えて来しました。昭和の初期には輸出総額の45%に及びました。

絹に限らず繊維を支配した者は世界を制して来ました。イギリスはインドを植民地にしてインドの木綿を支配し大英帝国を繁栄させ、アメリカは木綿の生産で世界の主導的国に発展しました。

註1) 筆者が南太平洋のニューヘブリデス諸島の石器時代代さながら（織物も土器もなく、農業らしき事もない）のスマールナンバース族と住んでいた時、毎日があちこちへ食料の採取生活でしたが、タロイモだけは決まった所に採りに行きました。

註2) 漢の時代に書かれた「漢書地理志」には日本も含めた長江文化一帯が「倭」と記されている事は注目に値します。

その後宋の時代になって漢族や匈奴に追われて南に逃避した人々は「蛮」と記されています。

「江上浩二の独り言」 67 江上浩二

人工知能 AIの急速な発展と疑い 第2弾

「短歌の世界と光の関係―光の色を詠んだ短歌を読み解く」

短歌という詩形は、日本の伝統的な文化であり、その中には自然を詠んだものが数多く存在します。中でも、光を詠んだ短歌は、季節や時間帯、場所によって異なる色や表情を見せる光の美しさを表現しています。ここでは、光の色と短歌の世界を紐解き、光が私たちに与える影響について考えます。

光の色と感情の関係

光には、様々な色があります。それぞれの色には、人の感情に影響を与える力があるとされています。たとえば、赤色は情熱やエネルギーを表し、青色は冷静や安定を表します。このように、光の色は、私たちの内面にも影響を与えると考えられています。

夕焼けの赤

「夕焼けの赤」という言葉を聞いたことがありますか？

夕方になると、空が赤く染まる様子は、美しく幻想的なものです。この「夕焼けの赤」は、短歌にもよく詠まれます。「夕日に 色鮮やかに 染まりぬる 山の稜線の 赤きころも」(与謝蕪村)

この短歌は、夕日に染まった山の稜線が、赤い色をまとっている様子を表現しています。赤色は、情熱やエネルギーを表し、夕陽に染まった山々が、情熱的でエネルギーシユな印象を与えます。

月の白

夜になると、月が輝きます。月の白は、清潔や純粹さを表します。この「月の白」も、短歌によく詠まれます。

「月見れば ちちにもこのそ 悲しけれ わが身ひとつの 秋にはあらねど」(源氏物語)

この短歌は、月を見て自分自身を省みる気持ちを表現しています。月の白は、清潔や純粹さを表し、自分自身を見つめ直すような気持ちにさせます。

新緑の緑

春になると、新緑が目に見え、鮮やかに映ります。この「新緑の緑」も、短歌によく詠まれます。

「みどりの、あふの中に こぼれつつ、 すすなりし、うぐいすの こゑ聞こえけり」(小野小町)

この短歌は、新緑の中で鳥の声が聞こえる様子を表現しています。新緑の緑は、活力や生命力を表し、季節の移

り変わりを感ぜさせます。

夜の黒

夜になると、外は暗くなります。この「夜の黒」も、短歌によく詠まれます。

「夜もすがら 物思ふころは 明けやらで 闇のひまさへ つれなかりけり」(紀貫之)

この短歌は、夜の中で一人物思いにふける気持ちを表現しています。夜の黒は、寂しさや不安を表し、内省的な気持ちにさせます。

光の色は、私たちの感情に影響を与える力があります。短歌には、季節や時間帯、場所によって異なる色や表情を見せる光の美しさを表現するものが数多く存在します。自然の中にある光と色を感じ取ることは、私たちの内面を豊かにし、心に平穏や安らぎを与えてくれます。光と短歌、その美しさに触れてみてください。

おっと、上の文章はあるSNSで紹介されていたソフト(特許出願 2023075714)が自動生成したもので、江上は(少し科学的、分かり易い、最近のテーマ、環境、光)というキーワードと比較的高齢者、短歌好きな人向けという条件だけを設定しただけで、世間でいうAIが江上という人と也を知らずして書いたものです。これを如何に評価すべきなのか、設定を若い人向けとして変えて文章を生成して比較したとこ

ろ、どちらかと言えば私の文章に似ている感じのものを生成してきました。全文を載せられませんので、変わった点の概要を示します。先ずタイトルが変わり、短歌好きと事が考慮されていない生成文章になり、次の様なまとめの文で終わります。

光の力は、環境問題の解決や新しい産業の創造にも繋がる可能性があります。太陽光発電やLED照明、光触媒など、既に多くの技術が開発され、実用化されています。また、光通信や光エレクトロニクスなど、新しい分野でも光の力は大きな役割を果たしています。今後、光の力を活用した技術や産業の進化が期待されます。私たちは、光を身近に感じながら、未来を拓いていくことができます。

AIに予期していない、新しいものを求めるのであれば、ここで全文を紹介した私には眩けない短歌の香り・匂いが漂う文章が断然好きですね。しかし、これは私の著作でないことは明らかで、引用・参照と言ったソースの開示等々のルールの検討を進めるべきと思います。

令和5年5月30日記す



初狩便り
(20)



花野みぷり



酢漿草かたばみ

初狩の夏は、東京より二〜三℃暑い。そんな暑さのなかで植物は夏を謳歌している。畦に、かわいい黄色の花が咲いている。酢漿草だ。東京でも、庭や公園、街路樹の下、ときにはアスファルトの隙間など、どこでも見かける花だ。酢漿草は一八〇種もあり、地下に球根を持ち、その下に根をおろして伸び、地表に広がる。繁殖が早く、根が深く、一度根付くと絶やすことが困難である。そんなことから、「家が絶えない」に通じると、武家の間では、家運隆盛・子孫繁栄の縁起担ぎとして、家紋に用いられることが多く、日本の十大家紋の一つのこと。平地では雑草として気にも留めない酢漿草だが、初狩では、こんなにきれいな花を咲かせる。あざやかな黄色の花と、ライトグリーンの葉はのびのびと美しい。

畑では、茄子、ピーマン、唐辛子が、花を咲かせ、実っている。南瓜も黄色の大きな花を咲かせ実をつけ、となりでは、西瓜とメロンも実をつけた。楽しみで仕方ない。日中は暑い、日が鶴ヶ鳥屋山に落ちると、すうーと空気が入れ替わり、温度が下がっていく。羽織るものが欲しいくらいだ。真夏の黄昏時の初狩は、値千金、大好きな時間だ。

(写真：菅野昌英)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2023年5月31日

内臓への負担

曇り空や雨が続く

お天道様が顔を出すと嬉しく感じます

少し前に書きましたが

梅雨入り宣言した後、に晴れ間が続く

なんてこと良くありますよね 笑

自然の予報は難しすぎますよね

今の時期

スギやヒノキの花粉が終わり

本来ならアレルギー症状の方がほとんど出なくなるのですが

今年は イネ科雑草（カモガヤ、ハルガヤ、オオアワガエリ、ネズミホソムギなど）

いわゆる夏の花粉で反応している方が多い気がします

その影響で

ただでさえ寒暖差で体調を崩しやすくなっているのに

さらに内臓の負担が大きくなり

背中がぎっくり系が増えています

3S+ユタポン+ヨーグルト+八分 はもちろん

化学物質をなるべく体内に入れない様にしていきましょっ

今日も笑いながら行きましょっ

2023年6月5日

木々の手入れ中のそばを通る時は要注意

台風一過の言葉通り晴天が続ぎ

梅雨入り前に大物の洗濯もできて助かります
予報では今日は暑くなりそうなので

水分補給を意識的に気をつけて行きましょう
先週 近くの公園で子供と遊んでいたところ

同じ敷地内で公園の木を伐採していました
トラックが数台入り中々の規模の伐採でした

梅雨入り前に木々の手入れをする時は
その近くを通る時は花粉や虫や虫の毛など

色々な物が乱舞しているので
マスクやメガネをするか 呼吸を止めて通るか

ということを以前の 本田のひとり言 にも書いて
いました

にもかかわらず

距離があるから という油断で何もせず遊び

翌朝2人で喉が腫れ透明の鼻水が止まらない

ということになりました 笑

大分声は出るようにはなってきましたが

普通に声を出すと咽ます

です

しばらくご迷惑をおかけするかもしれませんが

声が小さくて あまり話さなくても

機嫌が悪い訳ではありません

いつも元気です

今日も笑いながら行きましょう

「脇腹呼吸」

脇腹は 身体側 肋骨と
骨盤との間の 隙間の位置
脇腹 呼吸で動かせば
身体の調節うまくいく

脇腹つまんで 腰回し
側屈しながら よく伸ばし
呼吸を深めて 脇動きや
横隔膜が収縮し
息が深まり 気が整う

脇腹呼吸は 気を動かし
身体からだの熱を めぐらせる
熱は上に昇る為
脇腹呼吸で気を下げる
脇が堅けりゃ 息入らず
気が降りなくて 熱籠り

熱が籠もれば 煩熱し
胸が苦しく 落ち着かず
イライラ 不眠がやってくる

脇腹呼吸は 水動かし
身体からだの水分 循環す
水分 重さがある故に
呼吸でポンプし めぐらせる
脇が堅けりゃ 息入らず
水がめぐらず 浮腫となる
浮腫みは 足へと降りてきて
身体からだは だるくて重くなる

脇腹呼吸は 息強化
暑さと湿気をめぐらせて
夏に負けない 身体からだにし
夏バテ知らずで すごせるぞ
呼吸が強けりゃ 息続き
運動 睡眠 安定し
日々の生活 楽になる
生きるは息して 生き延びる
脇腹呼吸が いきのばす



「生きるは拍動・陰と陽」

生きるは拍動 陰と陽

朝昼晩から一年と 広がり縮まり流れてく

陽の活動・膨張し 極まる様に動く事

陰の休息・収縮し 止まって休んでゆっくりす

日々の生活 陰と陽 拍動しながら安定す

動く時には何事も 極まり目指して

動くこと 木が燃えると同じ様に

小さな動きで火を着けて

燃え始めるまで 動く事

燃えたら 全身全霊で 能力・体力使いきり

完全燃焼していけば 陽が極まり膨張し

余熱が余力生み出すなり

余力は余裕となりなりて

人の力を 豊かにす

半端に動けば 極まらず

膨張 弱くて広がらず

心身停滞 病となる

陽が極まる その後は

しつかり休んで 落ち着けば
陰が極まり 睡眠で

余熱や余力が 内に向き

収縮・収斂 することで

自分の陰へと 落とし込む

陽の経験 身について

新たな 原動力となる

休息足らずは 陰弱り

収縮ひきしめ 力落ち

気血や物事 停滞し

邪気を発して 病となる

生きる上での 陰陽は

いのちが 動けば広がって

いのちが 休めば縮まって

いのちの膨張・収縮が

しつかり動けば めぐりだす

生きるは拍動 陰と陽

いのちの活動 躍動す



偶作 ぐうさく

昨夜落雷激し さくやらくらいはげ

殿山木風

昨夜雷鳴 殷んにして収まらず さくやらいめい さか おさ

今朝雨止んで 一転優たり こんちようあめ や いってんゆう

西の方縹緲として 浜都現れ にし かたひようびよう ひんとあらわ

空翠薰風 愈憂いを払う くうすいくんぶう いよいようれ はら

偶作 昨夜落雷激

令和五年五月十二日

昨夜雷鳴殷不収 今朝雨止一轉優
西方縹緲濱都現 空翠薰風愈拂憂

(語釈) ○桜台楼…私の部屋。○優…おだやか。○纏緲…遠くかすかなさま。はるかに広いさま。○浜都…横浜。○空翠…したたるような緑色。○薫風…温和な初夏の風。

(通釈)

昨夜は雨脚が強くなり、雷が何回も何回も激しく轟いた。一転して今朝は明るくおだやかな空である。

テラスに立つと遠く西の方に遠くかすかに「みなとみらい」が望まれ、テラスの前の桜樹にはしたたるような緑が初夏の風にゆらいで私の心の憂さを吹き払うかのようだ。

※今年は初春より天候が落ち着かない気がする。早い暑さには地球温暖化を思い、一日の内でも気温の差が激しいようだ。コロナはやや鎮静化しても落ち着かない。警戒感には未だ地域差があるようだ。地球各地で山火事が到る所で発生しているそう。ウクライナでは改めて大規模な闘いがおきるのだろうか。それは兎も角、人生も最終コーナーに向かっている。

早めの夕食を始めた時、折からの雨脚が激しくなったかと思うと雷が鳴り出した。家から近いようだ。光ったと思ったらいきなり頭の上でバカバカバカバカバカ…ドーン！と天が割れんばかりの爆発音だ。何回も何回も繰り返す。戦争を知らない団塊の世代である私は「空襲、爆撃とはこんなモノか？(勿論恐怖心は別にしてだが)」と連想したが。一方、懐かしい思い出が蘇った。九州までの歩き旅で、広島に入る手前でいきなりど派手な雷に襲われた事だ。逃げ込んだ店先で雨宿りしていると降り出した雨はコンクリートを叩きつけ二十センチもあろうかと思うほど跳ね返り無差別機銃掃射をしているかのようだった。

「雷が一掃したか空の青」

編集室だより【二〇二三年五月】

今泉 由利

を注ぎ、梅、氷砂糖、焼酎、を交互にくり返し、あとは冷暗所に保存。一日一回、保存瓶をゆすめるのだそう。三週間ほど経過したら、出来上る。

○大きなダンボールが届いた。いったい何！マイアミの子達が「梅酒キットを送ったから造っておいて下さいね！」。私、梅酒というを、飲もうとしない。甘いお酒より、キリリとしたお酒の方がいい。全身、しつかりアルコール消毒が出来ているから。送られてきた氷砂糖の量で、目がまわった。「あんなに砂糖食べたくない」とは言いつつも、取りたての梅が、なんともなつかしい。育った庭には、観賞用、梅干用と様々梅の木があった。花が咲くのも、実を結ぶのも、とてもうれしかったから、送られてきた梅を、なんとかしよう…。

『梅酒のつくり』を読み読み、梅をよく洗う。布巾で水分を取る。梅のヘタを取る。一つ一つ爪楊枝でヘタを取った。大きな瓶は、新しいスポンジで、きれいに洗って、乾かした。

梅を入れ、氷砂糖を入れ、博多むぎ焼酎、三五度、天盞、

○図書室と名付けた部屋に、いつのころから集まってしまった本が並んでいる。本の背表紙が、忘れ果てていたことを、蘇らせてくれる。かなりうれしくなったり、忘れ果てていることに、びっくりさせられたり。いろいろな心が交差しだしたことが面白い。それにしても、まだ、カリフォルニアのストレージと、マイアミのストレージに、一番始めに日本から運んだ本がそのままになっている。もうすぐ寿命が尽きるというのに、どうしたら良いのかな。もう、ウカウカとしないで、本気になって生きなければいけない時が来ている。

長い間、三河アララギを支えて下さっている弓谷久子さんの六月号のお歌に、誤植がありました。訂正させていただきます。

伸び立ちて穂先に。ピンクの花一輪始めての花名は**麦桔梗**

弓谷久子



麦桔梗と、やさしい名前のお花です。

写真をおとどけ下さいました。

麦桔梗に出逢えてうれしくなりました。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利